

◆ 今週のコメント

- ・ 手足口病の定点当たり報告数は、1.54(63例)で、年齢階級別では、2歳(17例)、1歳、3歳(各11例)の順に多く、1歳～4歳で76.2%を占めています。先週に比べ減少しましたが、依然として過去5年平均値を上回っています。夏季に向けて患者数の増加が予想されますので、動向に注意してください。
- ・ 水痘の定点当たり報告数は、2.46(101例)で、7週連続で増加しています。年齢階級別では、1歳(24例)、3歳(20例)、2歳(17例)の順に多く、1歳～5歳で81.2%を占めています。
- ・ 流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、0.93(38例)で、2週連続で減少していますが、依然として過去5年平均値を上回る状態が続いています。

◆ 今週のトピックス:<ヘルパンギーナ>

ヘルパンギーナの定点当たり報告数は、0.63(26例)で、先週(0.32)の2倍となっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

ありません

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68、小児科定点41、眼科定点10、基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.01	1
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	6.51	267
	② 水痘	2.46	101
	③ 手足口病	1.54	63
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.93	38
	④ 流行性耳下腺炎	0.93	38
眼科	流行性角結膜炎	0.50	5

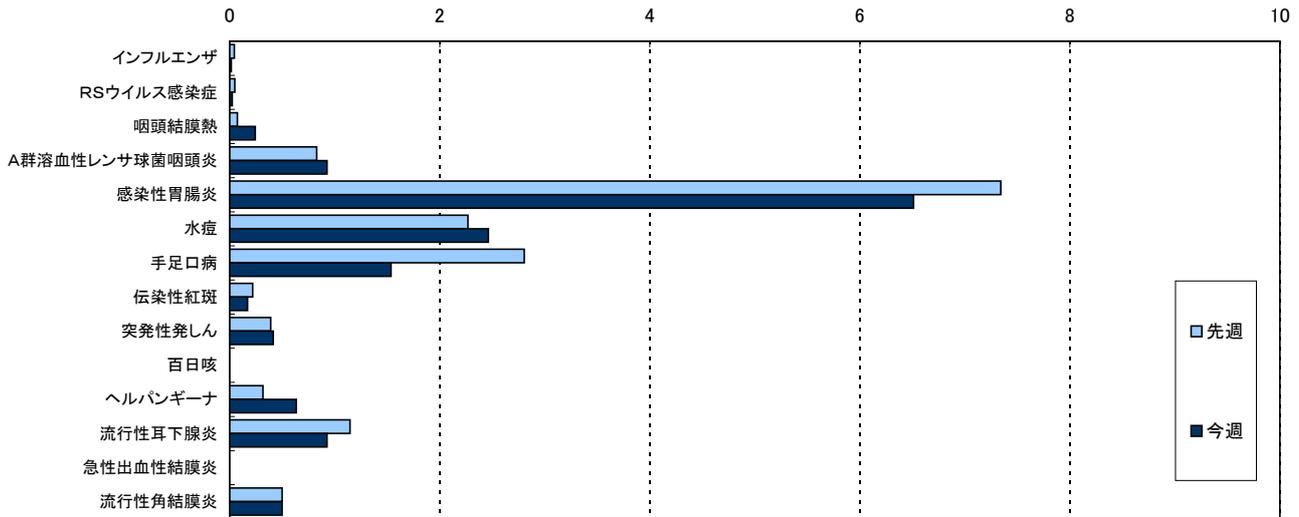
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス:<ヘルパンギーナ>

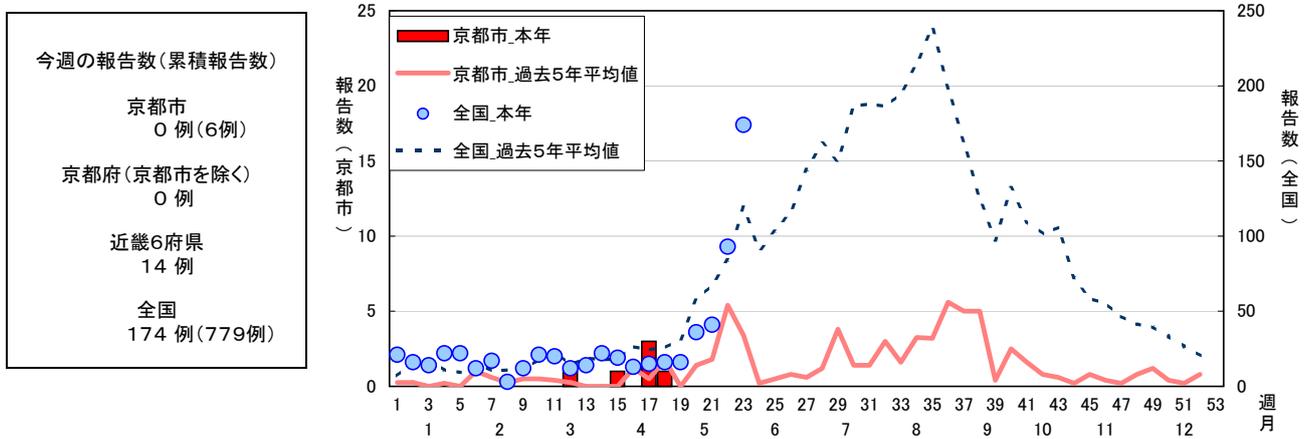
(注)京都市のデータは、平成22年6月17日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第23週)と先週(第22週)の定点当たり報告数の比較

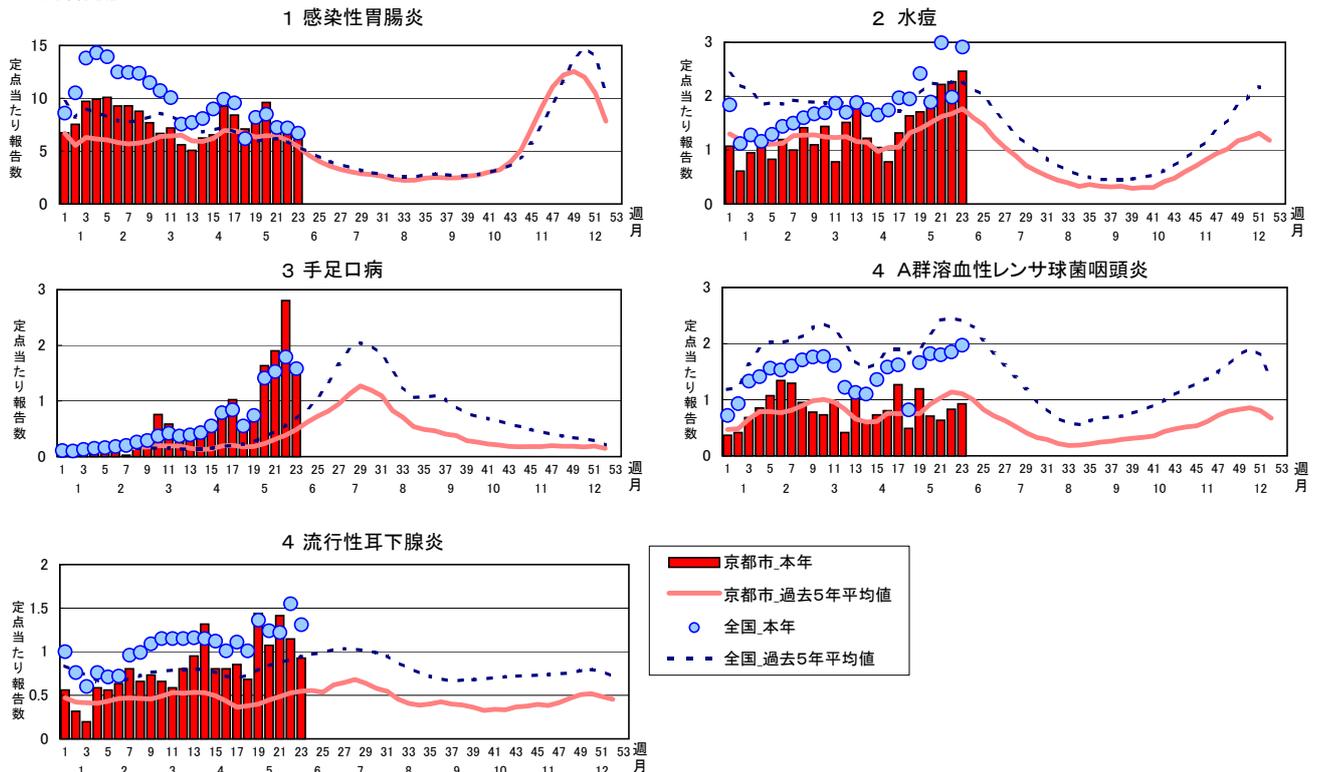


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移



3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



第23週(6月7日～6月13日)トピックス: <ヘルパンギーナ>

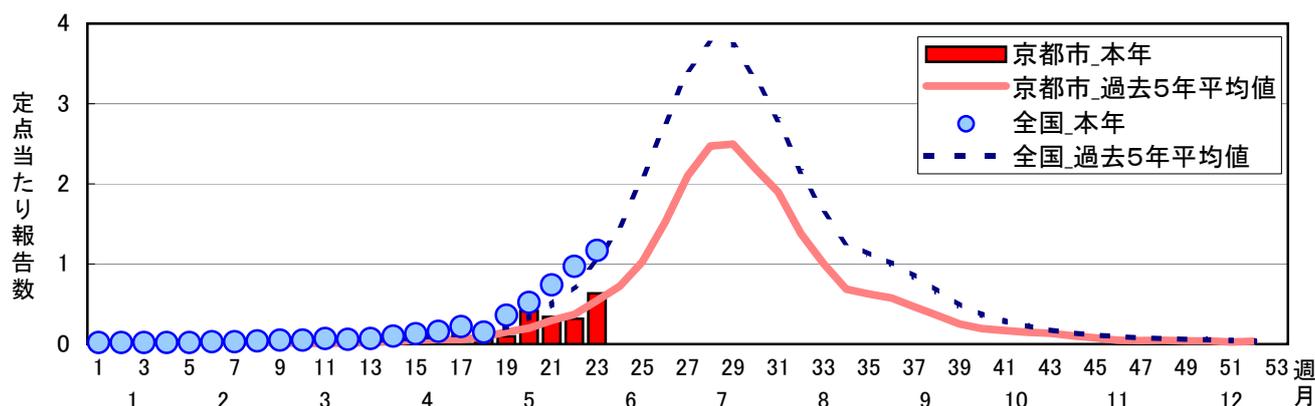
今週の定点当たり報告数は0.63(26例)で、先週(0.32)の2倍となっています。

ヘルパンギーナは、季節性が明確で、毎年、5月頃から増加し始め、7月から8月の夏季に流行し、9月から10月にはほとんどみられなくなります。本年は、京都市では、第20週から報告数が2桁に増加しており、全国でも第19週から増加が続いています。夏季に向けて患者数の増加が予想されますので、動向に注意してください。

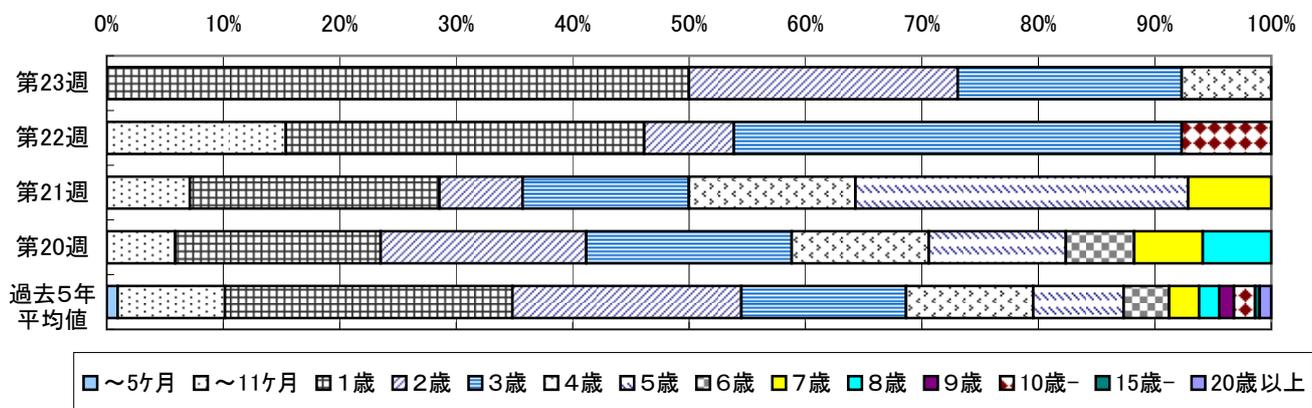
年齢階級別構成割合をみると、過去5年平均値では、1歳が24.7%と最も多く、次いで2歳、3歳、4歳の順に多くなっています。今週は、順位は同じですが、特に、1歳が50.0%(13例)と多くなっています。

行政区別では、11行政区中、7行政区から報告があり、先週に比べ6行政区(北、中京、東山、山科、南、西京)で増加しています。

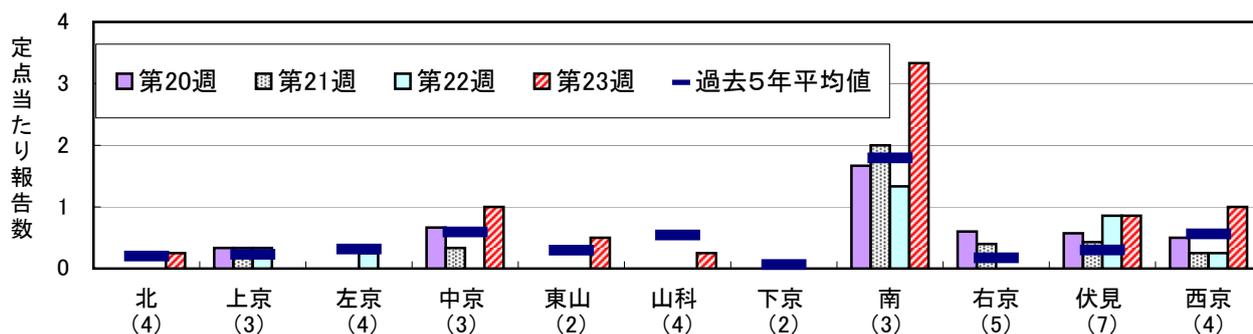
本市及び全国の定点当たり報告数 推移



年齢階級別構成割合の推移



行政区別定点当たり報告数の推移



()内は、定点医療機関数